

津田繩とその使用方法

田中 肇

本誌 15 卷 3 号の原道德氏の「稲の増産にハチミツ」で津田繩ブームとその実験の顛末を興味深く拝読した。しかし、津田繩の図がなく、また花粉の媒介方の詳細な記述はなかった。そこで明治 7 年 (1874 年) 刊行の津田仙の著書「農業三事下巻」から繩と受粉作業の図、それに製作方法を引用しておく。なお津田仙自身はこの繩を「稲麦媒助器械」(いねむぎなかだちきかい) としている。ここでは一部の漢字をルビにしたがって仮名に置き換えた。なお図は東邦大学の故久内清孝教授の蔵書からコピーした。

「荷氏 (ホーイブレイング氏) …一つの器具を

工夫せり…太き筆の柄ほどにて、長さ十間の麻繩に、羊の毛にて組たる細き紐の長さ五寸ばかりなるを、いく条 (すじ) もつける……この羊の毛の紐十条の内、一条は、羊の毛と同じ細さの麻紐を用いて、その端には、小さき鉛丸 (なまりだま) をつけておもりとなすなり、…用いる前に、まず蜂蜜を…紐に、薄く塗りつけてこれを手にて軽くなでこすりて、紐をあまねく潤すやうに注意すべし、これ花粉をほかに散さず、皆この紐につかしむるためなり、この紐花心の雌しべに触るときは、自然に花粉を花心に譲りあたふるなり、もちろん蜜を多分に用いるときは、花粉かえてこの紐に固着して、その用をなさず故によく注意して用いるべし、この器具は…こしらえること容易くして、その費用もまたはなはだわずかなり…用いるときは、…花を開かんとするときに臨みて…三人いちどにこれを震りうごかして、穂の頂に触るやうにすべし…三日の間、三度ずつくりかえて、行うべし」。

(〒176 練馬区羽沢 2-28-16)

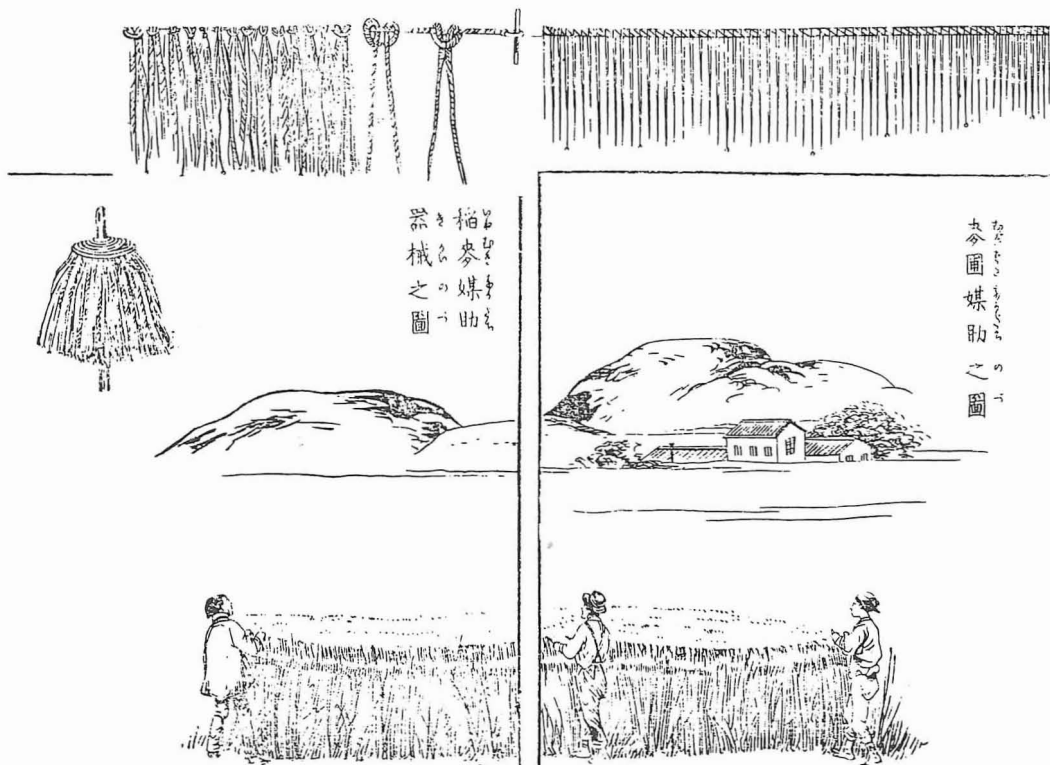


図 1 稲麦媒助器械および花粉媒助作業、津田仙著「農業三事 卷二」の 4 枚の図を組み合わせた